

IV 『親学プログラム2』の実施にあたっての配慮事項

このプログラムは、いじめや児童虐待予防につながる親の力・地域の力を育成することをねらっています。そのため、企画・実施にあたっては、以下のことに配慮しながら進める必要があります。特に「V 配慮が必要なプログラム」を実施する場合は、慎重に進めるとともに、必要に応じて、島根県立東部・西部社会教育研修センターに相談してください。

1 企画実施者（主催者）

プログラム実施のねらいを明確にした上で、「V 配慮が必要なプログラム」を実施する場合は、以下に示す特別な配慮が必要となります。

ただし、「V 配慮が必要なプログラム」以外の実施については、企画実施者のねらいや参加対象者の実態等に応じて実施されても構いません。

「V 配慮が必要なプログラム」を実施する場合の特別な配慮について

企画段階において

- ファシリテーターを派遣する各市町村の窓口である市町村教育委員会等（管轄する行政部局）と事前に綿密な確認を取り合い、次のような点について検討した上で、実施プログラムを決定してください。

- ねらいの確認
- 単発での実施なのか、シリーズ実施なのか
- 参加対象者の子ども集団の人間関係（いじめの有無や、配慮している事項等）
- 参加対象者の状況（配慮が必要な参加者の有無等）
- 上記を確認した上で、実施プログラム・サポート体制等の検討

実施前の打合せ段階において

- 実施プログラムが決定したら、当日までに、市町村教育委員会等（管轄する行政部局）・ファシリテーター・企画実施者（主催者）の3者で、次のような点について必ず打合せをしてプログラムを実施してください。

- ねらいの確認
- 参加対象者の子ども集団の人間関係（いじめの有無や、配慮している事項等）
- 参加対象者の状況（配慮が必要な参加者の有無等）
- 実施プログラム・ファシリテート体制・サポート体制等の確認
- 特に配慮が必要な場合は、配慮事項・支援体制・役割分担・事後の支援等の確認

実施当日において

- 企画実施者（主催者）も立ち合ってサポート体制を整え、参加者への個別の対応や事後の支援（面談や専門機関の紹介等）ができるようにしてください。

2 市町村教育委員会等（管轄する行政部局）

プログラム実施のねらいを企画実施者（主催者）から確認した上で、「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」を実施する場合、以下に示す特別な配慮が必要となります。

ただし、「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」以外の実施については、企画実施者のねらいや参加対象者の実態等に応じて実施されても構いません。

「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」を実施する場合の特別な配慮について

企画段階において

■ 企画実施者（主催者）から、『親学プログラム2』の実施についての依頼・問い合わせがあった場合、次の点について確認をとり、検討・調整してください。

- ねらいの確認
- 「Ⅴ 配慮が必要なプログラム」を実施する場合、特別な配慮が必要であること
- 単発での実施なのか、シリーズ実施なのか。可能であれば、シリーズ実施の検討を勧める
- 参加対象者の子ども集団の人間関係（いじめの有無や、配慮している事項等）
- 参加対象者の状況（配慮が必要な参加者の有無等）
- 実施プログラム・ファシリテート体制・サポート体制等の確認
- 上記を確認した上で、実施プログラムの選定・サポート体制等の検討

■ 企画実施者（主催者）から依頼を受け、プログラム実施となれば、企画実施者（主催者）との確認事項や、それに伴う配慮事項等を考慮し、派遣するファシリテーターを決定してください。その際、複数のファシリテーターで、かつ、『親学プログラム2』対応親学ファシリテーター養成講座修了者」を選定してください。

実施前の打合せ段階において

■ 実施プログラムが決定したら、当日までに、市町村教育委員会等（管轄する行政部局）・ファシリテーター・企画実施者（主催者）の3者で、次のような点について必ず打合せをしてプログラムを実施してください。その時、親学ファシリテーターに過度な負担がかからないような体制づくりに努めてください。

- ねらいの確認
- 参加対象者の子ども集団の人間関係（いじめの有無や、配慮している事項等）
- 参加対象者の状況（配慮が必要な参加者の有無等）
- 実施プログラム・ファシリテート体制・サポート体制等の確認
- 特に配慮が必要な場合は、配慮事項・支援体制・役割分担・事後の支援等の確認

実施当日において

■ ファシリテーターをフォローできるように、可能な限り市町村教育委員会等も立ち合ってください。また、参加者の気になる言動等があれば企画実施者（主催者）に報告してください。

日常的に

- 各市町村の親学ファシリテーターが、どの程度プログラムを進行しているか把握してください。また、可能な限り実施現場に立ち合ったり、参加者アンケートの回答内容を確認したりして、個々のファシリテート状況や力量についても把握に努めてください。
- 定期的に、親学ファシリテーターのフォローアップ研修を企画・実施してください。その際は、必要に応じて、島根県立東部・西部社会教育研修センターに相談してください。
- 「『親学プログラム2』をご利用いただくにあたって」について正しく理解し、企画実施者からの依頼や問い合わせに対応できるようにしてください。

3 ファシリテーター

プログラム実施のねらいを企画実施者（主催者）・市町村教育委員会等（管轄する行政部局）から確認した上で、「V 配慮が必要なプログラム」を実施する場合は、以下に示す特別な配慮が必要となります。

ただし、「V 配慮が必要なプログラム」以外の実施については、企画実施者のねらいや参加対象者の実態等に応じて実施されても構いません。

「V 配慮が必要なプログラム」を実施する場合の特別な配慮について

実施前の打合せ段階において

- 企画実施者や市町村教育委員会等との事前の打ち合わせは、現行の「親学プログラム」をファシリテートする場合よりも、より入念に行う必要があります。特に、配慮が必要な参加者の有無・その実態等、次の点について必ず打合せをし、把握した上で、ファシリテートにあたってください。

- ねらいの確認
- 参加対象者の子ども集団の人間関係（いじめの有無や、配慮している事項等）
- 参加対象者の状況（配慮が必要な参加者の有無等）
- 実施プログラム・ファシリテート体制・サポート体制等の確認
- 特に配慮が必要な場合は、配慮事項・支援体制・役割分担・事後の支援等の確認

- 「V 配慮が必要なプログラム」をファシリテートする場合は、事前にシミュレーション実施して、プログラムを正しく理解して、当日を迎えることをおすすめします。シミュレーション実施ができない場合は、島根県立東部・西部社会教育研修センターに相談してください。

実施当日において

- 現行の「親学プログラム」をファシリテートする以上に、参加者やグループに寄り添い、参加者一人ひとりの想いや意識、また、グループワークの流れや方向性を把握する必要があります。次の点については、特に心がけてファシリテートをしてください。

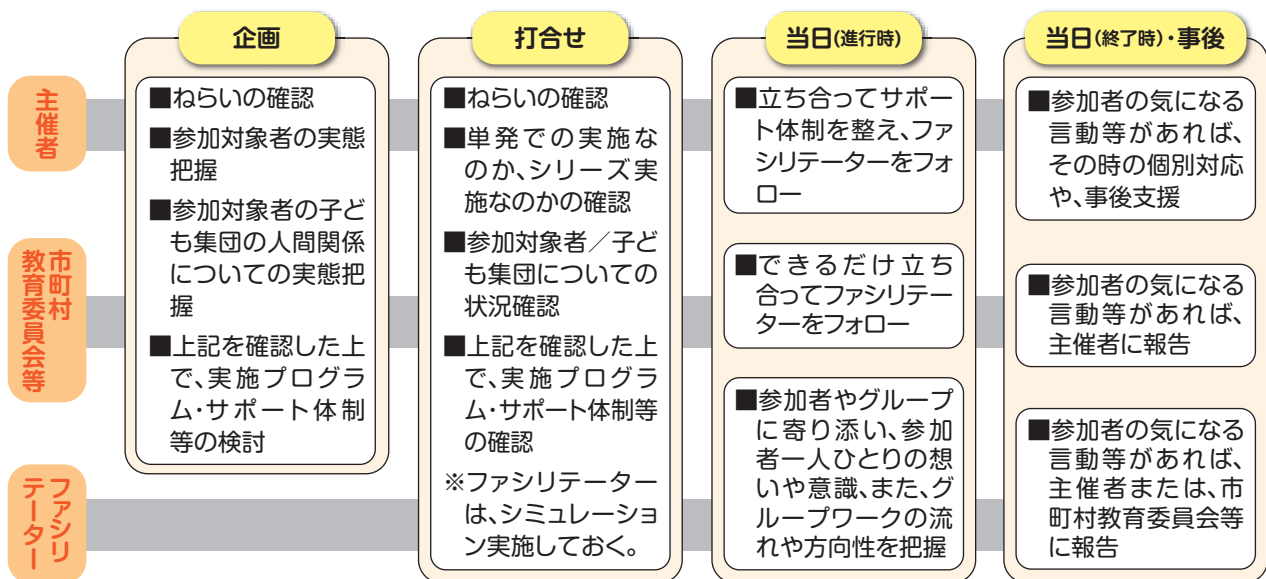
- 参加者を信頼する
事前に配慮事項を聞かされていても、偏った見方をせず、一緒に子育てを考えていくという姿勢でファシリテートしてください。
- 意見を受け止める
参加者から、企画実施者が考えるねらいやプログラムのねらいと反する意見や、受け入れることができない意見が出た場合、すぐに否定するのではなく、いったん受け止めてください。その後、場合によっては、ファシリテーターの考えを伝えることも考えられますが、なるべくグループや全体に、その意見を投げかけ、相互の学びを促してください。このことについては、企画実施者に報告してください。
- 参加者を守る
ワークの中で、つらい思いをしている参加者を把握した場合、寄り添い、声かけをしてください。場合によっては、企画実施者と連携して対応してください。
- グループの学習状況を観察する
グループの学習状況が企画実施者の考えるねらいやプログラムのねらいに迫っているか、間違っ

認識や、偏見などが生まれていないか、観察してください。

- 分からないことは答えない
いじめや児童虐待に関する専門的な知識や予防・問題解決に関する具体的な方策等を参加者から問われたとき、正確な知識や情報であれば伝えてもよいですが、自分の考えを安易に話したり、憶測で答えたりしないでください。必要であれば企画実施者へ伝え、対応してもらってください。
- 価値観の押しつけはしない
現行の親学プログラムでは、「アドバイスタイム」で終わることにしていますが、このプログラムでは、「おわりに」で簡単なコメントをして終了するようにしています。状況に応じて、現行の親学プログラムのように、絵本や詩を読んだり、失敗談を話したりして終わっても構いません。しかし、プログラム全体を通して、ファシリテーターの価値観を押しつけることがないようにしてください。
- 少しでも気になったことは報告する
講座中の参加者の言動や表情等、少しでも気になることがあれば、講座後、企画実施者か市町村教育委員会等に報告してください。
- 守秘義務を徹底する
事前打ち合わせや、講座当日知り得た情報は、外部に漏らさないでください。また、講座の終わりにルールとマナーの確認をしますが、特に「参加者の個人情報は持って帰らない、もらさない」を参加者に徹底してください。

4 「V 配慮が必要なプログラム」を進める場合の流れ

「V 配慮が必要なプログラム」を進める場合の企画実施者（主催者）・市町村教育委員会等（管轄する行政部局）・ファシリテーターの配慮事項の概略一覧です。



V 配慮が必要なプログラム

プログラム	想定される状況	条件・対応
1-④ ①② 先生ついでついで	<ul style="list-style-type: none"> ■ より良いクラスづくりのために、親と学校等（担任）が協力してできることを考えるプログラムだが、親が学校に対して不信感を持っている場合は、担任に対して否定的な意見等が出る可能性がある。 ■ 担任が答えたくない、もしくは答えるべきではない質問が参加者から出る可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 企画段階で慎重に検討を行い、効果が期待できると判断した上で実施の決定を行う。 ■ 否定的な意見も「貴重な意見」として受け止めることを学校等（担任）とファシリテーターで共通理解する。 ■ 実施に当たっては、和やかな雰囲気の中で活動できるようにアイスブレイクを丁寧に行うとともに、グループ分けにも配慮する。 ■ ルール（特に尊重）を全員でしっかり確認する。

プログラム	想定される状況	条件・対応
2-⑤ 幸せってなんだろう	<ul style="list-style-type: none"> ■ 自分にとっての幸せとはどんなものかについて考える内容なので、現在の家庭の状況や生活実態、これまでの体験などをふりかえる場面がある。参加者がそのようなことを考えたり、語ったりすることに抵抗を感じる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 本プログラム実施までに複数回親学プログラムを実施し、参加者の間に何でも言い合える関係性ができていると活動に入りやすい。 ■ 参加者の様子をよく観察しておく必要があるため、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ ルール（特に尊重・守秘）を全員でしっかり確認する。

※「3」の学習プログラムについては、参加対象者の子ども集団にいじめの事実がある、またはその疑いがある場合は、実施の判断を慎重に行う必要があります。

プログラム	想定される状況	条件・対応
3-① われわれ大人にできること	<ul style="list-style-type: none"> ■ いじめの構造を理解するために、参加者が“いじめる側”“いじめられる側”になって模擬体験を行う。そのことに抵抗を感じる参加者がある可能性がある。 ■ 全体の前で模擬体験のデモンストレーションを行う際に、すすんで“いじめる側”“いじめられる側”になる参加者が出てこない可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファシリテーターが「いじめの構造」を理解していないとファシリテートできない。いじめに関する正しい理解や本プログラムで行う模擬体験を経験し、いじめの構造について体感しておく必要がある。 ■ アイスブレイクで十分に打ち解けた雰囲気になるよう、状況に応じてアクティビティを追加して行う。 ■ 実施にあたっては、模擬体験に抵抗を感じている参加者に体験を強要しない。 ■ すすんで“いじめる側”“いじめられる側”になる参加者がいない場合に備えて、ファシリテーターと主催者でその役をできるように準備しておく。

プログラム	想定される状況	条件・対応
3-② たいいじめ め環境づく りおきな の	<ul style="list-style-type: none"> ■ ワーク①では、いじめの要因を「いじめられる側」で考え、いじめの正当化につながる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加対象者の子ども集団に、いじめの事実がある場合は、実施しない。 ■ いじめの要因は、「いじめる側」にあることをきちんと説明し、黒板などに明記しておく。 ■ 付箋の書き方を例示し、しっかりと確認する。
3-③ ない SOSを見逃さ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加対象者の子ども集団に、いじめの事実がある場合、または、疑いや心配がある場合は、過度に不安をあおったり、加害者の親を責めたりすることにつながりかねない。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加対象者の子ども集団に、いじめの事実がある場合は、実施しない。 ■ 参加対象者の子ども集団に、いじめの疑いや心配がある場合も、実施しない方がよい。ただし、企画実施者[主催者：学校・幼稚園・保育所・公民館等]が明確な目的をもって実施する場合は、ファシリテーターと綿密な打合せを行い、サポート体制を整えた上で実施する。
3-④ 子ネット どもを守る から	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットいじめに対して、子どもを守るためにできることを考えるプログラムだが、ネットについて専門的な知識が不足し、参加者の不安が大きくなる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットいじめに関わる講演会等とセットで企画するとより効果が高まる。 ■ 必要に応じて、ネットやネットいじめについての巻末資料を参考に相談窓口や専門機関などを紹介し、参加者が相談できるようにする。 ■ ファシリテーターもネットについての情報を普段から収集しておくとうい。
3-⑤ おもし、 こっ たら ：いじめ が	<ul style="list-style-type: none"> ■ いじめの原因は学校（担任）であるのとらえ、学校（担任）批判に偏った意見がでることが考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加対象者の子ども集団に、いじめの事実がある場合は、実施しない。 ■ プログラムのねらいを理解し、親としてできることについて話し合うよう伝える。 ■ 親と学校が理解と信頼を深め、連携して取り組む方向で考えるようファシリテートする。

※「4」の学習プログラムについては、参加対象者に児童虐待の事実がある、またはその疑いがある場合は、実施の判断を慎重に行う必要があります。

プログラム	想定される状況	条件・対応
4-① すてきな 子育て	<ul style="list-style-type: none"> ■ イライラしていたり、ストレスを強く感じたりしている等の理由で、「すてきな思い出」を付箋に書けない参加者が出る可能性がある。 ■ 人と比べ、「すてきな思い出」が少なく自分を悲観的にとらえてしまう参加者がいる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の様子をよく観察しておく必要があるため、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ 書けない参加者に寄り添い、話を聴いたり、例示を伝えたりする。強要はしない。 ■ 悲観的にとらえる等、表情の暗い参加者には、想いを聴いたり、肯定的な声かけをしたりする。 ■ その場にいることがつらい参加者がいた場合、企画実施者（主催者）と適切に対応する。

プログラム	想定される状況	条件・対応
4-② 子どもにもあなたの想いを届けてほしい、	<ul style="list-style-type: none"> ■ 児童虐待の被害・加害の経験がある場合、その時のことを思い出し、つらい気持ちになる参加者がいる可能性がある。 ■ 役割演技の設定と、今の自分の状況を重ね合わせ、不安な気持ちになる可能性がある。 ■ 親の都合を優先し、暴力をふるうこともしつけと捉え、暴力を肯定する参加者が出る可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の様子をよく観察する必要があるので、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ 役割演技に抵抗を感じる参加者には強要しない。 ■ 表情の暗い参加者がいた場合、様子を観察し、必要に応じて話を聴く。 ■ この場にいることがつらい参加者がいた場合、企画実施者（主催者）と適切に対応する。 ■ 暴力を肯定する発言があった場合、必要に応じて介入する。ただし、意見を否定するのではなく、気づきを促すような働きかけをする。
4-③ こんな時、わたしなら・・・	<ul style="list-style-type: none"> ■ 児童虐待の被害・加害の経験がある場合、その時のことを思い出し、つらい気持ちになる可能性がある。 ■ 自分の子育てを振り返る活動に参加できない参加者が出る可能性がある。 ■ 親の都合を優先させ、暴力をふるうこともしつけと捉え、暴力を肯定する参加者が出る可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の様子をよく観察する必要があるので、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ 自分の子育てを振り返る活動に参加できない場合、寄り添い話を聴く・例を示す等支援するが、強要しない。 ■ 表情の暗い参加者がいた場合、様子を観察し、必要に応じて話を聴く。 ■ この場にいることがつらい参加者がいた場合、企画実施者（主催者）と適切に対応する。 ■ 暴力を肯定する発言があった場合、必要に応じて介入する。ただし、意見を否定するのではなく、気づきを促すような働きかけをする。
4-④ 子どもの笑顔と未来のために	<ul style="list-style-type: none"> ■ 児童虐待の被害・加害の経験がある場合、その時のことを思い出し、つらい気持ちになる可能性がある。 ■ 「虐待がなぜ起きているのか」「虐待が起きないようにするには」の活動に参加できない参加者が出る可能性がある。 ■ 専門家からの話を聴き、リスク要因が一つでも該当すれば虐待をする家庭であると決めつける等、間違った捉え方をする可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の様子をよく観察する必要があるので、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ 「虐待がなぜ起きているのか」「虐待が起きないようにするには」の活動に参加できない場合、寄り添い話を聴く・例を示す等支援するが、強要しない。 ■ 表情の暗い参加者がいた場合、様子を観察し、必要に応じて話を聴く。 ■ この場にいることがつらい参加者がいた場合、企画実施者（主催者）と適切に対応する。 ■ 専門家の話を間違った捉え方をしている参加者には、介入をする。ただし、意見を否定するのではなく、気づきを促すような働きかけをする。 ■ 参加者から専門的な知識を要する質問が出た場合、専門家に対応してもらう。
4-⑤ あたたかい眼差しを	<ul style="list-style-type: none"> ■ 児童虐待の被害・加害の経験がある場合、その時のことを思い出し、つらい気持ちになる参加者が出る可能性がある。 ■ 通報の必要性が生じた事案を経験した参加者がそのことを思い出し、つらい気持ちになる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の様子をよく観察する必要があるので、ファシリテーターは2名以上が望ましい。 ■ 表情の暗い参加者がいた場合、様子を観察し、必要に応じて話を聴く。